

---

# ミツバチ

遊己

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミツバチ

【Zコード】

N7293A

【作者名】

遊己

【あらすじ】

1人の働き者の女と、1人のヒモのような男のお話。

蜂が飛んでた。  
ミツバチだ。

働き者のミツバチが花の回りをブンブン飛んでる。  
それをぼ~っと眺めていた。

私みたい・・・

そんな事を考えながら・・・。

「由香季」

宋太が私を呼ぶ。

「何?」「飯?」

「違う。こっち来て」

宋太はリビングでソファーに半分寝転んで手招きしてた。  
こういう時はろくな事がない・・・。

宋太に近づいて下に座る。

その途端に抱きしめられる。

「何・・・?」

「ん~?何となく。由香季の温もりが欲しくてねえ~」

軽い男。

毎回毎回こんな風に甘えてくる。

子供のように甘えたら何でも言つ事を聞いてくれると思つてゐる。  
きいてしまう私もいけないんだろうけど・・・。

「腹減った」

数十分後、ベッドでまどろみながら宋太が言つ。

「解つた。何食べたい?」

「こつてりしてないもの。俺、疲れちゃったから」

「じゃあ、冷やし中華でも作るわ」

「いいね。出来たら呼んでよ」

疲れてるのは宋太だけじゃない。

宋太は仕事もしてなくて、家で「ゴロゴロしてるだけなのに。時々日雇いでバイトをしてるみたいだけど・・・。

そのお金もどこに消えてるのか全く家には入れてはくれない。家賃と光熱費、それに宋太のお小遣い。

それだけを稼ぐのは大変だけど、宋太の為と頑張っていた。

16の時に20歳の宋太と駆け落ちした。

その時の宋太はこんなのじゃなかつた。

もつと潑剌としてた。

仕事をきつちりこなしてくれた。

いつからだろう。宋太が変わったのは。

宋太は急に仕事を辞めてきた。

何の相談もなく、本当に急に辞めてしまった。

徐々に傍若無人になってきて、甘えん坊になつてきて・・・今ではもう子供みたいになつちゃつてる。

ワガママを言われて、好きだからってだけで何でも言う事をきいてしまったのが駄目だつたのは解つてゐる。  
家で「ゴロゴロ」しても、文句を言うつもりは無い。

宋太に離れて行かれたら・・・宋太のいなかつた時期が思い出せないくらい、宋太がいる毎日が浸透してしまつてゐる。

宋太の世話をするのが私の生き甲斐になつてしまつたのかもしれない。

い。

「宋太、出来たよ」

「あいよ」

冷やし中華とスープ、サラダを添えてテーブルに並べる。

1DK。狭い部屋なんだから言わなくても解るだろうに・・・

言わないと絶対にベッドから出でこないんだから。  
美味しい美味しいとズルズルと食べて行く宋太。

宋太のこういう所は好きだな。

口に合わない時は本当に不味いって言うのが玉にキズだけど・・・。

宋太が甘えてくる時、それは小遣いをねだる時。

毎月渡してる分じゃ足りなくて、無くなつたら私に甘える。

財布から勝手に出していかないだけマシ。

そう思うしかない。

今日も結局私の財布からは諭吉さんが3枚宋太の財布へ消えていつた。

こんな生活をかれこれ3年間は続けている。

疲れるけど、文句を言いたくなる時もあるけど、これはこれで幸せなんだと思っていた。

宋太は私がいなかつたら生きてはいけない。

それを実感できるから、私は頑張つて働くし、家事も全部こなす。それで宋太が私から離れないんだつたらお安い御用だと思うから。

ある時、宋太が言った。

「オレ、こつから出て行こうと思つ」

頭が真つ白になつた。

「このままじやオレ、駄目になるから」

今更?って思つた。

「由香季と一緒にいたら、オレ、甘えちゃうから」

私がいけないの・・・?

「もう26だし、そろそろ自立しなくちゃつて思つて自分勝手だ!!」

猛烈に反対した。

何時間もずつと言い合いをいた。

宋太は私がいなかつたら生きていけない。

仕事なんかここ何年もしてないじゃない。

宋太が一人で生きていくなんて……そんなの出来るわけが無い。

何時間もかけて説得した。

それでも宋太の気持ちは変わらなかつた。

静かに穏やかに、否定し続けた。

決して私の意見に首を縊には振らなかつた……。

宋太が出て行くと言つてから2週間後

本当に宋太は出て行つてしまつた。

私が仕事に出てる間に、置手紙だけを残して……。

『由香季へ

今までありがとう。

由香季がいたから、オレは今まで生きてこれた。

でも、このままじゃ、あまりにも男として情けないって思つたんだ。

由香季といふ間は本当に楽だつたよ。

何もしなくても全でが揃えられて、オレはなにもしなくとも生きてる事ができたから。

今になつて漸くそう思う。

やつと思つ事が出来た。

次に会うときは必ずひとり立ちした男になつてるから。

その時にまだお前が一人で、まだオレに気持ちを残していくてくれるなら・・・・

待つてくれなんてカッコいいことは言えないけど、せめて忘れないでいて。

由香季に忘れられるのが一番つらいから・・・・。

オレは由香季を忘れない。

またいつかお前に会いたい。

信じないだらうけど、オレはお前の事がこの世の中で一番好きだよ。

今も昔もずっと由香季だけを見てた。

その事は、無理かもしけなけど信じて欲しい。

いつかどこかでまた会える事を祈つてゐる。  
本当に今までありがとうございました。

これからは自分の為の人生を送つてくれ。

宋太』

不思議と涙は出なくつて・・・宋太がいなだけの今までの部屋が  
やたら広く感じられた。

宋太は家具とかには一切手をつけずに出で行つたみたいだ。  
何も無くなつてはいない。  
ただそこに、宋太だけがいない。

帰るとかならずソコにいた宋太がいない。

「お帰り」

と微笑んで出迎えてくれた彼が・・・彼だけがいない。  
悲しい、とか、寂しい、とか言う感情じやない。

耐え難いほどの虚無感が私を襲う。

これから私はどうやって生きていけば良い?

何のために働くの?

自分の為の人生つて何?

自分の為に何かをするつて・・・どうすれば良いの・・・?

食べ物が喉を通らず、眠る事さえ出来ない日々が何日か続いた。  
仕事にいく理由も見いだせなくて、無断欠勤を続けている。  
きつともう解雇処分になつてゐるだろう。  
ずつとずつと考えた。

手紙の最後の一文。

『これからは自分の為の人生を送つてくれ』

この一言が・・・私には引っかかる仕方が無かつた。  
私は自分の為に生きる事をしてなかつた。

でも、何でそれを宋太が心配する必要があるの・・・?

宋太の為に生きる事は、してはいけない事だったのだろうか……？

もしも……これが逆の立場だったら、私はどう思うんだろう……。

宋太が毎日働いてきたお金で生活する。

私は家事すらしないで、彼に甘えたつきりで……。

宋太の人生は私の物のようになってしまって……。

ワガママも全て受け入れてくれる。

そう、最初は最高かもしれない。

甘えるだけ甘えて、最高の恋人を持つたと誇りにすら思うかもしない。

でも、ソレが3年間も続いたら……。

……私も、宋太と同じ事をするかもしれない……。

宋太の人生は、宋太が選ぶものだ。

私が宋太の人生をどうこうして良いものじゃない。

そうか……

宋太は、私に私らしく生きて欲しかったのかもしれない。

私なら、宋太には、宋太らしく生きて欲しいと思うから……。

宋太の為に働くんじゃない。

自分の為に働いて、自分の為に生きるんだ。

一年後。私は何とか、昔したかった仕事をすることが出来ている。自分らしく生きてみるのは、人の為と思つて、気持ちを押し売りするよりも遙かに難しい。

でも、前の仕事よりも遙かに楽しいと思える。

宋太が気付かせてくれた楽しさだと思つ。

宋太は言つていた。

『由香季に忘れられるのが一番つらいから……。』

バカだね。

こんな楽しい事知っちゃつたら、もう宋太のことなんて忘れてしま  
いそうだよ。

早く迎えに来ないと、本当に忘れちゃうんだ。

宋太のサラサラだった髪も

宋太のキラキラしてた瞳も

宋太の笑うとえくぼが出来る可愛らしい頬も

宋太の私の体がスッポリ隠れちゃうような大きな背中も

宋太の抱きしめる時の力強さも

宋太の良く甘えられた時のずる賢そうな表情も

わがままや嘘吐きなところも

そして、田一杯幸せな時に見せた笑顔も・・・

全部忘れちゃうぞ！

もしも、まだ私の事を前のまま愛してくれているなら、早く迎えに  
来て。

どうでも良くなつてないのなら、ひとり立ちしたかっこいい宋太を  
私に見せて。

そしたら私も見せてあげる。

私が私らしく生きている所を。

そして、言つてあげる。

私はまだ、宋太の事が好きだよって、今ならまだ言つてあげる。

昔は、宋太の巣に、せつせと蜜を運んで、巣を作っていた。

今は、私の巣に、蜜を運んで、私の巣を作っている。

そんな私の巣に、いつか宋太の巣を合体させて、大きな大きな巣を作りたいね。

2人のミツバチが作る巣は、きっと1人で作った巣よりも居心地が  
良いんだろうな。

(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございました。

ほのぼのしたものが書きたくなしました。

ちゃんとほのぼのした物になつているかどうかは解りませんが・・・。

なんとなぐ、ホッコリした気持ちになつて下されば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7293a/>

---

ミツバチ

2010年12月31日05時56分発行